

二〇二二年度 中学 帰国生入学試験問題

国 語 (60分)

△注 意▽

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから5ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙①および②の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙①および②の定められたところに記入しなさい。

受 験 番 号			



## I

以下の設問に答えなさい。

【問1】 次の①～⑮について、――部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。また、⑯～⑳について、――部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- |   |                  |   |                 |
|---|------------------|---|-----------------|
| ① | ヨウシヨウの頃の記憶を思い出す。 | ⑪ | 私のイチゾンでは決められない。 |
| ② | ピアノをエンソウする。      | ⑫ | アジア各国をレキホウする。   |
| ③ | トトウを組む。          | ⑬ | 川にソって歩く。        |
| ④ | 法案をヒケツする。        | ⑭ | 矢をイる。           |
| ⑤ | キョウチュウを察する。      | ⑮ | 顔をソムける。         |
| ⑥ | 実力をいかななくハツキする。   | ⑯ | 節穴に巣をつくる。       |
| ⑦ | 働いてチンギンを得る。      | ⑰ | 警笛を鳴らす。         |
| ⑧ | 記憶のダンペンをたどる。     | ⑱ | 人を裁く。           |
| ⑨ | カケイ図をひもとく。       | ⑳ | 黒潮に乗って北上する。     |
| ⑩ | 組織のカイカクを進める。     |   | 養蚕の盛んな地域。       |

【問2】 次の①～⑤の慣用句について、に当てはまる語を（ア）～（カ）の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

また、その意味として適当なものを（キ）～（サ）の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

慣用句

- ①  をくくる
- ②  が浮く
- ③  を打つ
- ④  であしらう
- ⑤ 青菜に

語

- （ア） 手
- （イ） 塩
- （ウ） 歯
- （エ） 鼻
- （オ） 高
- （カ） 水

意味

- （キ） 軽々しい言動に接して、不快に思う。
- （ク） 元気を失ってしょんぼりする。
- （ケ） 大したことはないと見くびる。
- （コ） 見下したように冷淡れいたんに扱あつかう。
- （サ） 必要な対策をとる。

## II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

他人と円滑に意思疎通をするコミュニケーション力を重視する傾向は、あらゆる企業の採用で広がっています。

三十年程前までは、公務員試験ではペーパーテストさえ合格すれば、面接はほぼフリーパスでした。しかし最近では、ペーパーテストの成績の比率が下がり、面接の印象が良くなければ合格できなくなりました。多くの企業も採用で重視する項目に「コミュニケーション力」を挙げており、「真面目にコツコツ努力することが得意、でも人と喋るのが苦手」な学生は、就職活動で自分をアピールできず、何十社受けても一社も内定が出ないことが珍しくありません。

学生もそのことを自覚していますが、コミュニケーション力には性格も関係するため、一朝一夕にはなかなか変えられません。コミュニケーション力に無理やり自分を適応させることに疲れ果て、就活をやめてしまい家に引きこもってしまう学生もいます。最近では就活指導を専門とする塾もあちこちにでき、そうした場では面接指導なども行っています。膨大なデータが蓄積されていて、何々省採用向けの面接、銀行採用向けの面接など、採用先に合わせた面接指導もしています。当然のように安くない受講料がかかります。

社会の動向に通じている人の中には、「今後の社会を生きていくためにはコミュニケーション力が必要だ」と早くから気づき、インターナショナルスクールや先進的な教育を行っている学校に子どもを通わせている親も少なくありません。以前、ある公立の科学館に講演に行ったのですが、そこで行われていた子ども向けの科学教室では、小学生になったばかりの児童の取り組みを母親たちが参観していました。きっとその親たちは、自分の子どもがサイエンスに興味を持つことを願って、その教室に申し込んだはずです。科学実験をしている子どもたちを熱心に見ている母親の姿に驚いたものです。ちなみに費用はほとんどかかりません。

子どもの知的な興味や関心は、親自身の教養に対する関心に大きく左右されます。家に大きな本棚があつて、そこにたくさん本がある家庭に育った子どもと、まったく読書をしない親のもとに育った子どもでは、知的好奇心に大きな格差が自然に生まれてしま

うのです。OECD（経済協力開発機構）の調査でも、自宅にある本の冊数と子どもの学習成績の間には相関があるという結果が出ています。

余談ですが、知り合いからこんな話を聞きました。ある大卒の女性が高卒の男性と恋愛結婚して一緒に生活し始めた後で、初めて気づいたことがあったそうです。それは、「観るテレビ番組が違う」ことです。その男性は正社員として頑張って仕事をしている真面目な人ですが、観るテレビはお笑い芸人が出てくるバラエティ番組ばかり。一方女性のほうは、クイズ番組やNHKのニュース番組を見て育ったタイプ。彼女がクイズ番組で、「この答え、わかった」と言ったら、夫に「よく知ってるね」と感動されたそうです。子ども時代にどのような家庭に育ったかで、成長してから興味や関心の領域が違ってくることをまざまざと感じさせられたエピソードです。

最近の日本では、実践的な英語教育の重要性が叫ばれるようになり、小学校から英語の授業が始まっています。しかし語学を身につけることは水泳のような運動と一緒に、いくら畳の上で泳ぐ真似をしても泳げるようにはならないように、どれだけ本物の外国語に触れているかが最も重要です。学校の授業で一週間に二、三時間学ぶぐらいでは、英語は決して身につきません。やはり、普段の日常生活でどれだけ英語に接しているかが決め手になるのです。

親が仕事で英語を使っていたり、帰国子女で幼い頃に外国で生活していたりする人は、そういう点で圧倒的に有利です。英語を話すことが当たり前の環境で育つと、自分も「当たり前」に適応するために自然に頑張るのです。

昨今わずか二十年程の間に、日本では経済のグローバル化が急速に進みましたが、早くからその潮流を見抜いていた家庭の子どもとそうでない子どもとの間では、英語力に圧倒的な差があるのは当然です。「英語は話せて当たり前」という家では、幼い頃からバイリンガル教育に力を入れますが、親自身が英語の「え」も話せない家では、そもそも「英語が大切になる」という発想すら浮かびません。英語力もまた、学校の学習では到底追いつかないぐらいの「格差」が拡大しつつあるのです。

【出典】山田昌弘『新型格差社会』（朝日新書、二〇二一年四月、七二～七六ページ）

【問1】 この文章を一〇〇字程度で要約しなさい。

【問2】 この文章を読んであなたが考えたことを、四〇〇字程度で書きなさい。

